



## 判断について二つ

多田鉄雄

その一つ。先達でラジオを何気なく聞いていると「馬車で園児を送り迎える幼稚園訪問」が聞えて来た。例のあの幼稚園のことだなど思いながら聴いていると、仲々面白い。馬車で送り迎えることによつて、通園途中の事故を防止し、幼児を安全にしかも楽しく通園させ、動物に対する関心と愛情を深めて行く教育的効果をあげようとする園長の考えはよくわかる。次に附添つて来ている親たちを聴くと、「馬車に毎日乗れる幼稚園にあがるのだと子供がせがむので、この幼稚園に入れることにした」「子供は毎日幼稚園へ行くのが楽しみで早くから家の前に立って馬車の来るのを待っている」などで、今度は馭者の言葉で「馬は実に伶俐です。朝迎いに出て子

供の姿を見ると、すぐ幼稚園の子を間違ひなく見分け自分で脚をとめて子供の乗るのを待つ」とあり、女の先生の云うには「一度では物足りなくて、一旦幼稚園へ来てからも、又二度も三度も乗りつづける子供もいるのです。一応は一度だけのことになっていますがあまりのりたがるので」とのことであつた。父兄の言葉の中にこの幼稚園は馬車が出来てからとても園児が増えたと云うのがあつたが、それもうなづける気がした。

私がこの放送を持出して来たのは何もここでこの馬車の功罪を論じようとするためではない。園長、親達、馭者、先生の馬車に対する考え方がそれぞれちがっていることを問題にしたいからだけのこ

とである。たしかにアナウンサーの質問が夫々の人々に対して違っていたのであるから、一応は答が色々だったのはそのためかとも思えるが、しかしその答え方を始めから終りまでよく聴いていると、どうしても夫々考え方がちがうと云うことを認めないわけにはいかないのである。もしこのように考え方がちがうとすれば馬車の価値に対する判断もちがって来る。又、同じ程度に高い価値を認めている場合でもその基盤がちがうわけである。例えばこの馬車が園長の意図しているように教育的意義を持つべきものならば、その先生が「一度だけがきまりですよと云いきかせますが、あまり、のりたがるものですから」と若干の子供に、いわば規則を違反させたまゝ見逃してしまうことは、毎日のことであり唯一度の例外ではないだけに一寸心配になって来て、この先生は子供が馬車から出て幼稚園の中へ入ってしまったから教育を初めるのか知らと思われても仕方ないとも云える。これは極言しすぎているかも知れないが、この場面では少くとも園長ほどには、この馬車を教育上重視していないとは云うことが出来るであろう。馭者は馬車と云えは何よりも誇る気持で一杯であった。又、親達の中にはこの放送で発言した人々のほかに色々な考えの人が沢山居たことと想像される。実は発言した人は少数であったから、大部分の親達は園長と同じように、この馬車が色々な点で教育的効果をあげてくれると期待しているのかも知れ

ない。ともかくもこの馬車に関して色々な人が色々な判断していることはまちがいないであろう。そして、どれもこれも一応の理由がある。たゞ、例えばこれを教育的見地から考えて行く場合と、そうでない場合とでは考え方が大きく二分されて行き、少くとも教育的見地に立てば、その間に若干の見解の相異があるにしても究極的には考え方の基盤又は方向に必ず共通点を見出すことが出来るであろう。私は物の考え方が立場の相違によって非常にちがって来ると云うこと、したがってその判断もちがって来ると云うことを先ず云いたいのである。即ち「良い」とか「良くない」とか云われているものでも、実はそのように判断している立場を同時に理解するのでなければ、正しくその判断をうけ入れることにはならないのである。次にこの馬車を世論とか評判とか云うものと結びつけて考えて見よう。輿論と云うものが初めはかたよって形成されることがあっても次第に修正されて最後には良識的に、且つ公正に結実して行くものであると云うことは、デモクラシーを支える原理の一つであるが、その過程では、ある場合には正当な判断に達していない多数の声の方が優勢によって輿論となったり、ある場合には大きな声が一宣傳と云ってもよからうが——輿論をリードしたりすることのあるのは否定出来ないことであろう。そうであるとすれば、この馬車が評判になった場合、あるいは馬車で送り迎えするのは安全な、いい幼稚園

であるとかうことが世論になった場合、それがそのまゝ決定的な輿論にまで伸びて行くものであるか、それともいつかは違った考え方が支配的になって、それが究極の輿論を形成するかは未だわからないままであると云わなければならぬ。このような場合に私達は如何に処すべきであろうか。それは日和見主義ではなくて、十分に事の実相を洞察して行くべきであり、いたずらに先入観に支配されたり、偏見にこだわったりするべきではなく、自らに正当な判断が下せるまでは、即かず離れず、柔軟な且つ慎重な態度をとることこそ正しい在り方であるだろう。国民性の相違としてイギリス人は考えながら歩く、フランス人は考えた後で走り出す、スペイン人は走ってしまった後で考えるときは、よく云われていることであるが、この点では少くとも考えてから歩か、さもなければせめて考えながら歩くものでありたいと思う。こんなことに判り切ったことと云われるかも知れない。たしかにこの馬車の例のような場合にはあわてて誤まった判断を下すようなことはないであろう。しかしこれが「アメリカの新しい理念」「ドイツの新しい教育」だとか、「某先生の主張、意見」だとか何等かの權威らしい衣を着せられた、その上一見したところなるほどと思われるような代物で出現した場合には、どうも私達はそれにとびつのがせつかちでありすぎるようです。に終戦後の教育界の色々の事象を省みると、このことを否定出来な

いような気がする。終戦直後の空白状態の影響もようやく収めて来ているように見える現在、私達はそうそうもつと足を地につけて物を考え、正しい判断のもとで行動して行きたいと思われる。

その二つ。もともと日本人は数字にうといと云われて来たが、終戦後は統計数字を重視するアメリカの影響もあって近頃は統計数字が盛んに用いられている。しかしよく吟味して見ると、例えば統計の常識の一つとも云える「統計のうそ——統計を見る人及び作る人の社会分析の不明確から、又は数字の内容の内容分析の不明確から起るあやまり——」が気付かれずに読まれてしまうなどのことがしばしばあるように思われる。丁度先達の本誌に載った文部省の玉越氏の「教育白書にあらわれた幼稚園の現状」は数字を主に取扱っている。これを例にして述べて見よう。同氏は教育行政の専門家であるから、教育社会の事情・数字の奥にあるものについては十分理解されているのであるが、紙数の関係から説明がはぶかれているところもあるので、ここで取上げて見るわけである。読者は先ずこの叙述が同氏によって直接に書き下されたものでなく、「わが国教育の現状」によるものであるとの冒頭のはしがきにも一応留意する要があるし、ここに用いられている統計資料が文部省指定統計と地方教育費調むと云う二つの異なった調む方法による数字であることに注

意しなければならぬ。前者が世間一般に行われている項目別を  
っているのに対し、後者は教育財政の特別の観点から極めて異色の  
ある項目別を立てているのである。又後者は公立のみについて調む  
しているであつて、例えば第三表、第四表は第六表と共に、公立  
のみについての表なのである。之は本文を見落すことなく読んで行  
けば間違いないのであるが、うっかり表のみを見ると、部分を全体  
と見誤まることになる。次に第四表幼児一人当り消費的経費（教授  
費——人件費とも——維持費、修繕費、補足活動費——用人給与、  
給食費など、——所定支払金——保険金——共済組合費、退職金な  
ど）で鳥取、秋田、山梨はその経費が全国の最高乃至最低を示して  
いるのであるが、これはそれらの県が公立一園しか存在していない  
のであるから——同氏はその説明を省略しているが——偶然の数字  
と云う他ないのである。又経費に大きな出入りがあるのは同氏の叙  
述にあるように所在地の地方差に由来するのであるが、その大半の  
比重を占めているのは教員給であるから、経費が多い府県は先づ高  
給の教員が比較的多いことと、維持費その他に多くの費用がかかる  
ことを意味しており、又この表から直ぐに見ることは出来ないが一  
園当り乃至一教員当り幼児数がこの経費の高低をも支配しているわ  
けである。

次に財政の公私別を見ると私立幼稚園は保護者が七割五分、設置

者が二割五分となつてゐる。私立幼稚園の経営者はもとより営利で  
これを営んでいるのではないが、幼稚園創設に當つて土地、建物を  
自らの経費で提供し、その後増設その他の臨時経費を負担する他  
は収入で賄つて行くと考えるのが普通で、毎年になつて全経費の  
二割五分を自ら支出するとすれば通常又は通常以上の規模の幼稚園  
では一体どこからその費用を捻出して来るであらうか——宗教法入  
立のような特殊の例外を除いて——。それ故、この二割五分は主と  
して臨時費（土地建物、増設の費用——それが年賦償還の場合も含  
めて——）と見るべきであつて、そのことは第二表に私立において  
建築費、設備費の比率が国公立より高いことから推定できるし、  
更にこの年度又はその直前までの私立幼稚園の新設数を見合せても  
うなづけることである。それ故にこの私立幼稚園の設置者負担額、  
その比率は特殊の事情によるもので、これを何の説明もなくその年  
度の数字として提示するならば、その限りにおいてはこの文部省指  
定統計の数字は「統計のうそ」をおしていることになるわけであ  
る。このように数字は魔物とも云われるようにそれによつて判断す  
る場合には十分の注意が必要であると考えられる。